



平成 26 年 2 月 3 日
神戸市立稗田小学校

節分の鬼

1 月は早々と過ぎてしまい、明日は立春、その前日の今日は節分です。暦の上では季節は春を迎えるわけです。

さて、節分と言えば「豆まき」ということになります。平安時代、9 世紀末の宇多天皇の時代。夜な夜な鞍馬山から下りてきた鬼が都を荒らし回っていました。この鬼を退治するため祈祷が行われるとともに3石3升の大豆の炒り豆を鬼の目へ当て、これを退治したという故事伝説が残っています。この伝説がもとになって豆まきははじまったと言われていています。「鬼」はあらゆる災い（悪）の象徴。この鬼を生命力の象徴である豆によって追い払う。生の豆ではなく炒り豆なのは、災いの芽が再び出ることを嫌ったためだといえます。節分の夕刻、「鬼は外、福は内」と唱えながら豆をまき、年（数え年）の数だけ、まいた豆を食べ、1年の無病息災を願います。元々は家長（父親）か、その年の年男（今年は午年の人）が豆をまいて鬼を追い払ったようですが、今は市販の炒り豆に付録でついている鬼の面をかぶった父親が鬼の役になり、家族から豆をまかれて盛り上がるという図式になっています。

鬼には赤鬼、青鬼の2種類だけでなく、黄鬼、緑鬼、黒鬼など数種類あるようです。これらの鬼は、災害、病気など外からやってくる災厄を象徴するだけでなく、それぞれ、貪欲、怒り、我執、不摂生、愚痴など、人の心のよくない面も表しています。したがって豆まきで「鬼は外、福は内」と唱えるとき、私たちは外からの鬼を退け、心の内に潜もうとする鬼を追い払うと同時に、無病息災と清廉、平穩、思いやりの心といった心の福を招き入れることになります。

節分に巻き寿司を食したり、魔除けのためヒイラギ鯛を門口に挿したりすることもあります。季節の変わり目にあたって、子どもたちが家族や自身の心身の状態を見つめ直し、健康かつ清々しい気持ちで春を迎えることができるよう願っています。

豆まきでまいた炒り豆は、ちょっと余分に食べるとさらに効果があるらしいです。が、豆をまく係になるであろうおやじさん方。年齢にもよるのですが、豆の食べ過ぎで腹痛をおこすことのないよう、くれぐれも加減を…。

学校長 牧坂 浩一